

# 児童生徒の振り返り評価に関する多角的観点の検討 —大学生の視点を通じた基準の明確化—

## A Study on Multilateral Perspectives in Evaluating Students' Reflections —Clarifying Standards through the Perspectives of Undergraduate Student—

櫻井 幸聖<sup>\*1</sup>, 新村 涼一<sup>\*2</sup>, 松本 奈菜三<sup>\*1</sup>, 谷塚 光典<sup>\*3</sup>, 森下 孟<sup>\*3</sup>  
Kosei SAKURAI<sup>\*1</sup>, Ryoichi NIIMURA<sup>\*2</sup>, Nanami MATSUMOTO<sup>\*1</sup>,  
Mitsunori YATSUKA<sup>\*3</sup>, Takeshi MORISHITA<sup>\*3</sup>

<sup>\*1</sup>信州大学教育学部

<sup>\*1</sup>Faculty of Education, Shinshu University

<sup>\*2</sup>松本市立筑摩野中学校

<sup>\*2</sup>Chikumano Junior High School, Matsumoto City

<sup>\*3</sup>信州大学学術研究院教育学系

<sup>\*3</sup>Institute of Education, Shinshu University

あらまし: 振り返りは、学習の定着や自己成長を促す重要な要素であるが、その評価基準が曖昧であるため、指導者によって判断が異なるという課題がある。特に、振り返りの質をどのように評価すべきかについて、明確な指標が求められている。そこで本研究は、児童生徒の振り返りを客観的に評価するための観点、評価基準を明確にすることを目的とした。教育学部生を対象に Web アンケートを実施し、振り返りの評価観点について調査を行った。キーワードが盛り込まれていれば評価を得やすいが、教師の観点には一定のバイアスがかかる可能性が否定できず、文章表現などがより良い印象を与える可能性が窺えた。

### 1. はじめに

小中学生の学習活動を自ら振り返り意味付けたり、体験活動の成果を振り返って次の学びにつなげたりすることは、小中学生の主体性や興味・関心を引き付けるために重要である<sup>(1)</sup>。振り返りの質に関する評価基準としては、「振り返りの質」に関する評価基準<sup>(2)</sup>や「メタ認知的基準」<sup>(3)</sup>が提案されているが、これらの基準は特定の観点に限定され、包括的なものとは言い難い。「問題発見」「解決策の着想」「学習課題の設定」「学習結果とリソース」「解決策の検討」「最終解決策の提案」を評価基準とした先行研究<sup>(4)</sup>もあるが、大学生向けに設定されたものであり、小中学生向けの検討は、管見の限り十分とは言い難い。そこで本研究では、小中学生の振り返りを適切に評価するための基準を策定し、その基準が振り返りの質の向上に寄与するかを明らかにする。具体的には、小中学生の学習特性に基づく評価基準を作成し、教師視点からその妥当性と有効性を検討する。

### 2. 方法

S 大学教員養成学部生 4 年生 242 名を対象に Web 上でアンケート調査を行った。架空の生徒 3 名の文章 (表 1) を見て、授業の終末場面 (振り返り) としてより望ましいものを 5 段階尺度評価でそれぞれ比較してもらった。その際、「主体的に学習に取り組む態度 (学びに向かう力, 人間性の涵養等)」「その時間を通して学んだことや考えたこと (思考判断・表現)」「学習問題 (めあて) に対する自身の答え (知識・技能)」「次時に向けた課題意識」「文字数」の 5 観点で評価してもらった。

### 3. 結果と考察

アンケート調査の回答は 188 名 (回答率: 77.69%) であった。また、図 1~5 は各観点において、5 段階尺度で人物間の比較・評価した結果 (回答者の平均値) を図式化したものである。

学習問題 (めあて) に対する回答 (図 3) は、全員の記述に一定の評価が得られたが、それ以外は松本はなこ、信州こうせいの評価が相対的に高くなっていた。よって、学習問題に対する評価では、キーワードが盛り込まれていれば一定の評価が得やすく、評価にばらつきが生じやすいと考えられる。

信州こうせいと松本はなこは類似した文字数で回答しているにも関わらず、文字数以外の評価基準をみると信州こうせいの方がより高い評価を受けていた。この差が生じた要因として、信州こうせいの回答が自分の考えを明確に示している点が挙げられる。また、生徒の文章表現が教師の好みに合致していたことや、文章能力の高さが評価に影響していた可能性も考えられる。つまり、教師の評価観点に一定のバイアスがかかる可能性が否定できなかった。

特に、図 5 では、信州こうせいと松本はなこの回答の文字数に 5 文字しか差がないにも関わらず、信州こうせいの評価が高くなっている。この結果から、別の評価観点が影響している可能性が示唆される。例えば、信州こうせいの回答は改行が適切に行われており、文章の体裁が整っている点が挙げられる。これにより、可読性が向上し、より良い評価を受けやすくなったと考えられる。

今後は、得られた評価結果をもとに、実践を通じた考察の妥当性と有効性について検証していきたい。

表1 架空の生徒が示した振り返り記述

氏名	記述
信州こうせい	はじめ、ごんは自分が楽しいというだけでいたずらをして村の人に迷惑をかけていた。兵十がお母さんのために捕まえたウナギを逃がした時も、楽しかったが、お母さんが死んでしまったのを知ってごめんなさいという気持ちになった。そして、栗や松茸を兵十に届けたが、盗んでいるの間違って撃たれてしまった。しかし、兵十に本当のことを気づいてもらえて許してもらえた気持ちになった。
松本はなこ	はじめは楽しさだけでいたずらをしていたが、兵十の母親の死をきっかけに、罪悪感を覚え、今までの行いを反省した。兵十に栗や松茸を届けているのをわかってもらえなかったが、撃たれたあとに気づいてもらえてうれしい気持ちと撃たれてしまって悲しい気持ちとになった。ごんの気持ちの変化は分かったので、次は兵十の気持ちの変化を考えたい。
ながの太郎	いたずらをして楽しかったけど、死んじゃって悲しくなった。

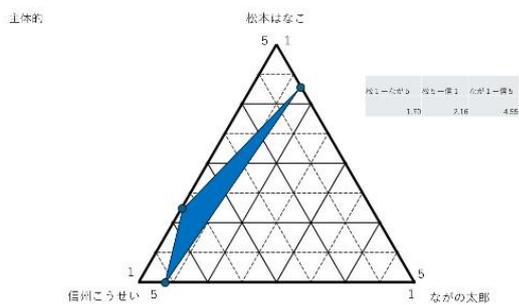


図1 主体的に学習に取り組む態度に関する人物間の評価結果

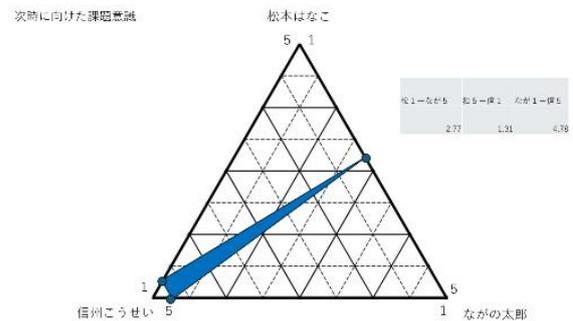


図4 次時への課題意識に関する人物間の評価結果

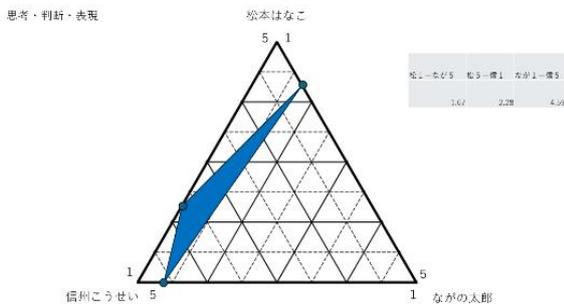


図2 その時間を通して学んだことや考えたことに関する人物間の評価結果

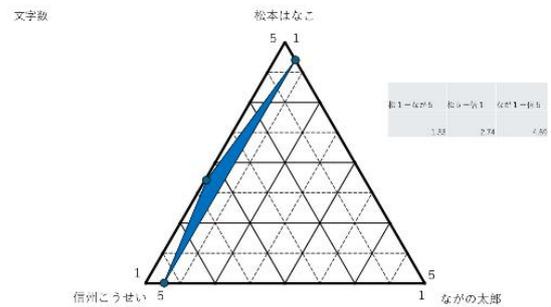


図5 文字数に関する人物間の評価結果

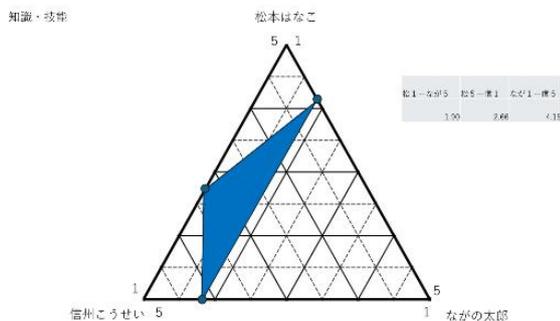


図3 学習問題(めあて)に対する自身の答えに関する人物間の評価結果

参考文献

- (1) 文部科学省：“新しい学習指導要領等が目指す姿”，[https://www.mext.go.jp/b\\_menu/shingi/chukyo/chukyo3/iryo/attach/1364316.htm](https://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo3/iryo/attach/1364316.htm) (2015)
- (2) 生井裕子, 中島久樹, 山下徹：“小学生の「振り返りの質」を高める実践及びその評価 --リフレクションワークと概念型指導”，清泉女学院大学人間学部研究紀要, 第19号, pp. 1-16 (2022)
- (3) 柴里美：“数学的問題解決後の振り返り記述をいかに評価するか-失敗から引き出された教訓の質を捉える新たな基準の提案-”，日本教育心理学会, 第70巻, 第3号, pp.231-245 (2022)
- (4) 斎藤有吾, 小野和宏, 松下佳代：“ルーブリックを活用した学生と教員の評価のズレに関する学生の振り返りの分析-PBLのパフォーマンス評価における学生の自己評価の変容に焦点を当てて-”，大学教育学会誌, 第39巻, 第2号, pp.48-57 (2017)